

# 『抱月の揺籃期を追って』

～鉄山に生きた佐々山家の歴史を探る～



明治四十二年『近代文芸之研究』

此の心境を芸術といふ

味に徹したる人生也

観照の世界也

全的存在の意義を髣髴す

在るがままの現実に即して

## 抱月家族三代の係累

### 祖父 佐々山一平

広島県戸谷村出身、若い頃、長沢鉦に居たが、  
佐々田家の要請で白甲鉦に着任。文久3年田野原鉦支配人。



### 父 佐々山半三郎

白甲鉦で弘化3年生まれ。文久3年に田野原鉦へ、  
明治3年、一平を襲名、高源鉦、大前鉦の支配人を歴任。



### 佐々山瀧太郎

明治4年生まれ。島村文耕の学資支援を受け島村家へ入籍。

## 島村抱月揺籃期年譜(家族三世代の係累)

- 天保 11 祖父一平は、長沢鉦(波佐)から佐々田家に請われて白甲鉦(久佐)支配人として着任。  
11 三浦彦太郎あて長沢鉦の借財返済計画を送る。
- 弘化 2 6 佐々田家へ千両箱を貢ぐ。浄光寺(久佐)を再建する。
- 弘化 3 3 父半三郎白甲鉦で誕生する。
- 嘉永 1 1 津和野藩へ1,200両献金 苗字御免名披露格で「佐々山」姓となる。
- 安政 5 5 次男小太郎白甲鉦で誕生する。
- 文久 1 9 桑原新吉発起「思寄」に一平も参加していた。
- 文久 3 12 田野原鉦打入れとなり一家は移転。
- 元治 1 父半三郎・チセと結婚。9 祖父一平死亡。半三郎は18才。
- 慶応 1 5 久佐櫛本与三郎30両。8 木束医師寿助6両。8 上来原勘治6両。9 酒屋新八郎、金10両。11 九平30両。12 山方惣代貞四郎25両。
- 慶応 2 3 半三郎、田野原鉦鉄山を退去。下土居に移る。7 ケイ出生後死亡。
- 慶応 3 4 二ヶ寺へ嘆願口上書を送付。8 最中山神社へ絵馬額奉納。
- 明治 1 大利鍛冶屋で日雇い生活を送る。
- 明治 3 9 「苗字御免」を契機に一平を襲名した。佐々田家から和解で12 高源鉦打入れ。チセは下土居で臨月を迎える。
- 明治 4 1 長男瀧太郎が生れる。一平所有の「中屋名」を森平右衛門が小作請人となる。
- 明治 5 2 浜田地震発生。高源鉦壊滅。大前鉦を打入れて、一家は大前鉦所へ転居。
- 明治 6 大前鉦で生活。
- 明治 7 米相場が急騰した。鉄山関係者が議定書を交わす。11 次男雅一が生れる。
- 明治 8 相場で失敗して失脚、「中屋名」屋敷町15坪に家宅を構えて大前鉦から移転する。  
12 「堤防積金算用帳」によると18銭6厘佐々山一平。
- 明治 9 2 「大前鉄山20年間譲渡」負債整理を佐々田家に預ける。
- 明治 10 1 「中屋名」を佐々川只右衛門へ売却、負債整理。3 再び、下土居へ移転。瀧太郎、小国小学校(下等)へ入学する。一平の弟小太郎は、これを機に広島県戸谷村入澤家へ入籍。
- 明治 11 4 三男寛一が生れる。11 小国村民6名が頼母子講返掛け残債処理で一平を救済。
- 明治 14 5 久佐村熊屋へ一家5名(一平、チセ、瀧太郎、雅一、寛一)が移転。長女イチが生れる。
- 明治 15 6 瀧太郎、久佐小学校上等第6級定期試験合格(採点表)。学業改正で中等科を終了。
- 明治 16 卒業した瀧太郎は桑田俊策の紹介で濱田の薬局の見習い生として住み込み、小学校高等科に通学。家族は、久佐村179番舎へ転居。28年暮れまでいた。
- 明治 17 7 松江始審裁判所浜田支庁の給仕(日給8銭)として採用される。
- 明治 19 10 島村文耕が浜田支庁へ着任し、瀧太郎の上司とし運命的な出会いがあった。
- 明治 21 11 瀧太郎は「雇」に昇進し、月給5円が支給された。文耕は瀧太郎の向学心を読み取り、上京させて勉強させようと考えた。
- 明治 22 春、に島村文耕すから養子縁組の申し出があり、父一平は猛反対をなす。
- 明治 23 2 瀧太郎は辞職願を提出した。3 上京して東京専門学校へ入学。
- 明治 24 春、文耕は再び父一平に抱月との養子縁組をせまり、3 とうとう認めさせ願に依り廃嫡。  
6 島村文耕と養子縁組をなし「島村瀧太郎」として島村文耕の養子入籍となった。  
抱月、二十歳の決断と父母の気持ちを察するに余りあるものがある。

## 鉄山で一世を風靡した一平

祖父一平の時代は、「たたら製鉄」により、弘化年間には、相当な純益を上げ佐々田家へ千両箱を貢ぎ裕福に導いた。

嘉永元年(1848年)正月5日、津和野藩へも1,200両を献金して、同年正月19日付で苗字御免名披露格が許され、「佐々山」姓を名乗った。そして、久佐村の浄光寺を師匠寺とし、佐々山一平が壇頭となり、浄光寺の本堂の再建を行った。

## 田野原鉦

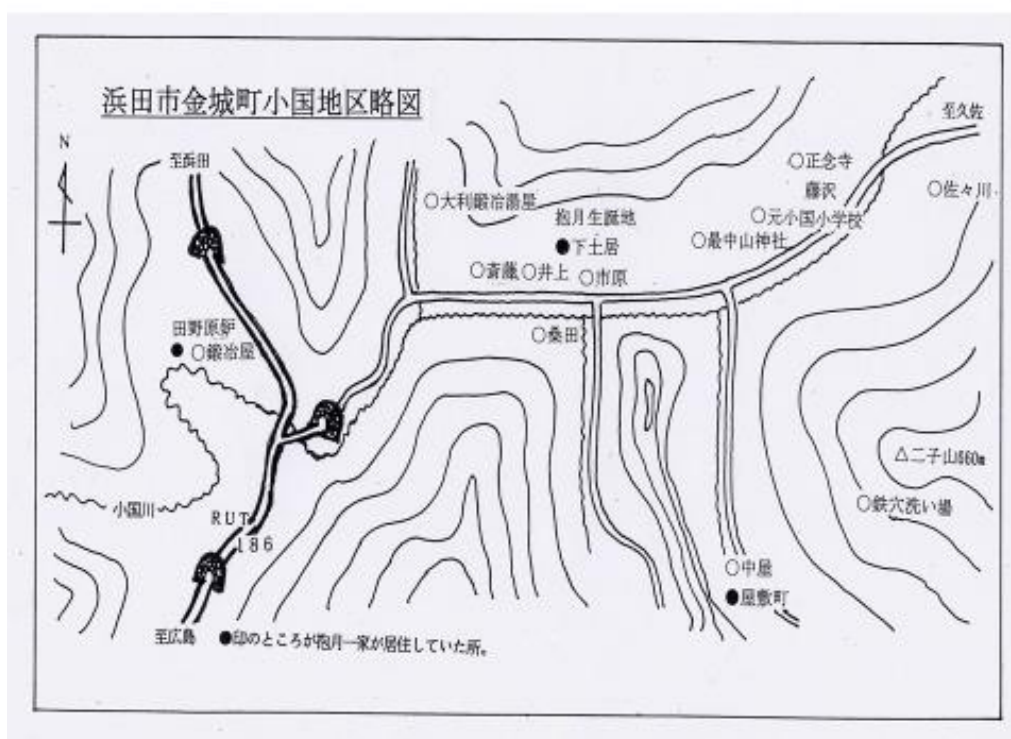
久佐村白甲鉦周辺の木炭の原木が減少したため、新たに小国村(浜田市金城町小国)田野原鉦(持人・佐々田弥高)132坪(横11間、長12間)の打ち入れを祖父一平と父半三郎の手によって、文久3年(1863年)12月に構築して、佐々山一家は、田野原鉦へ転居した。越して来た佐々山一家は、「吹小屋」を中心に鍛冶屋1軒、本屋1軒、土蔵1軒、下小屋20軒の山内の規模であった。「田野原たたら」において、一平の息子半三郎は、益田の大谷チセと結婚した。順風万端な中、元治元年9月23日に祖父一平は永眠した。

慶応2年春には、半三郎一家は、鉄山を追放され、小国村下土居123番舎(市原家所有)へ転居。同年7月28日、チセは、長女ケイを出産するものの直ぐに他界させる不幸が重なった。この間の生計を繋ぐため、一時は、大和鍛冶屋で日雇い生活が続いた。

慶応3年4月、久佐村の浄光寺と隆興寺宛てに嘆願状を送り、佐々田家との和解の執り成しを願い出た。同年、半三郎は、和解嘆願祈願を籠めて、氏神である最中山神社へ「絵馬額」一面を奉納した。

## 鉄山の掟(おきて)

鉄山では、「月・水ノ有ル穢女ハ、7日ガ間不入ラ鑪ノ内エ、子ヲ生タル時、女ハ33日不鑪エ、其夫ハ17日ガ間不入。産後ノ女ト同火不喰事30日」(『鉄山秘書』鉄山ニ血ノ穢ヲ忌み嫌の項による)によって、鉄山勤めの一平は、臨月を迎えたチセを「下土居」に置き、1里程離れた高原鉦に泊り込み鉄山再起に傾注した。



## 一平襲名と和解で高源たたら打ち入れ

明治3年9月19日付、「苗字御免」を契機に、父半三郎高源鉦の打ち入れを任された。同年12月に小国村蔵方の桑原新吉より佐々山一平名で米3石を借り入れ、新たな気持ちで鉄山をスタートさせた。

『明治3年小国二ヶ村午納米人別指引帳』によると、明治3年12月25日に米3斗を借用している。

## 抱月誕生

小国村下土居にて、瀧太郎(抱月)が誕生した。下土居の右手瀬戸の小さな谷川がある。普段は水の流れは少ないが、一雨振ると滝のように急流を流れ落ちる。父半三郎はこの滝のような流れと長男であることから瀧太郎と命名したのではなかろうか。

## 浜田地震

明治5年2月6日、浜田地震(M7)が発生。石見地方一円が被害をこうむった。「高源たたら」は、壊滅した。このため近くの「大前たたら」を開設し、抱月一家は、転居していった。

## 大前たたら⇒「中屋名」屋敷町へ

一平は、この頃株相場に手を出し高額な借金を背負い込んでしまった。7年暮れには借金の催促を受け途方に暮れ、再び佐々田家へ災難を持ち込んでしまった。

翌8年(1875年)には大前鑪から、鉄山退去を命ぜられ、一平の持分である小国村『中屋』名に再び帰ってきた。もともと、「中屋」には、阿妻氏へ小作請けさせていることから、一平は「中屋」の少し上手の畑の地名「恩田平(おんたびら)」の山裾の荒地15坪ばかりを開き佐々山一家は移った。現在、この土地は、戦後に田地を造り替え土地台帳では「恩田平」となっており、明治時代より坪数が増えている。

## 「中屋」屋敷町⇒下土居

明治10年1月、「中屋」名田・畑・宅地を佐々川只右衛門へ売却して負債整理に当てた。明治10年3月21日、下土居に再び戻ってきた。祖父一平の実弟、小太郎は、広島県戸谷村の入沢家へ養男として独立していった。

この下土居での生活時期が抱月の幼年期の就学期間であった。抱月は小国小学校で下等小学課程(4年間)を学び基礎学力を身に付けて行った。明治13年12月に教育課程が改正され、初等科3、中等科3、高等科3となり、抱月は、中等科1学年を就学したこととなる。

※8Pの初等教育学齢表をご参照ください。

## 下土居⇒久佐村「熊屋」へ

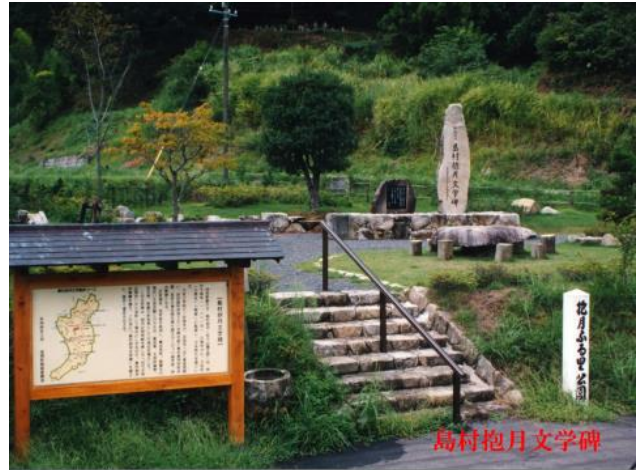
佐々山家が小国村を離れたのは明治14年(1881年)5月2日であった。佐々田家と再び和解して一家五名(一平、チセ、瀧太郎、寛一)は、久佐村(金城町の久佐)162番ノ1舎に落ち着き、小原谷の『熊屋』で苦難の新生活を始めた。瀧太郎は明治14年、15年(1882年)を久佐村の久佐小学校(久佐八幡宮)で中等科2~3学年を学んだ。

抱月の回想によると「熊屋時代」の家族が一番平穏で幸せであった時期だという。



## 故郷の父

私の十ばかりの頃は、(明治14年ころ)  
一家が久佐といふ田舎に住んでゐた。(熊屋)  
家は四、五十坪ばかりの前庭を取って、  
芸州境への小街道に沿うた(芸州街道)  
瓦葺の一軒家で後ろは深い谿谷になり、  
そこから可なり水嵩のある小川が  
横手をめぐって流れてゐる。  
街道といつても人通りは極めて稀であるが、  
其の道を挟んで、向ふには青田が広がり、  
其の向ふは又山になってゐる。(熊屋から見た)



### ふるさと熊屋時代を描写した文学作品『故郷の父』

或る夏の夕暮れであった。夕食を済ませた後、家内中前の縁側に出て涼んでみると、何処からか蝙蝠が、一疋飛んで来て、軒のあたりを高く低く飛び廻はる。私や二人の弟やは総立になって騒ぎ出した。すると、今まで晩酌の微酔顔をわざとむづかしさうにして煙草盆を前に控へ、煙を吹かして居た父が、だしぬけに立ち上って、長押しに懸けてあつた檜の丸扱の間棒を小脇にかかへ、尻端折で跣足で飛び下りた。びっくりして見てみると、父は撃剣をやるやうな身構へと、気合をかけるやうな掛声とで、頻りに其の棒を扱いたり、水車のやうにくるくる廻したり、門の恰好に構へたりしながら、蝙蝠を相手に棒使ひを始めた。

棒と撃剣とは父がこくなに零落して以後の、唯一の自慢芸であつたのだ。上になつたり下になつたりして、暫く相手になつてゐた蝙蝠は何時か飛び去つて了つたが、父は尚盛んに空に向つて独りで棒を使ってゐる。其のうち日は段々暮れて、夕月の光が一杯にそこらを浸して来た。其の月影の下で、磨いた檜の棒が、否妻のやうにきらきらと光る。母はほほ笑みながらじっと見て居た。私は強い豪い父だと思ふと同時に、何だか其の猛烈な勢が、幼心に物凄くて、慈愛の父といふ感じと調和しない、荒んだやうな気持を覚えた。

父はやがて棒の手を収めて、汗を拭きに小川の縁へ降りて行く其のあとをぼんやり見送つてゐると、遥か筋向ふに二軒並んで立つた農家の前で、据風呂の火の赤く燃え立つのが見えた。二人の弟は其のときもう母と一緒に蚊帳の中に這入つていた。

今から考えると、父はあの時、心に佐々木厳柳の燕返しや、宝蔵院の水月の檜の伝説などを繰り返して居たのたらう。其の父が故郷で不慮の死を遂げてから、今年は七年である。

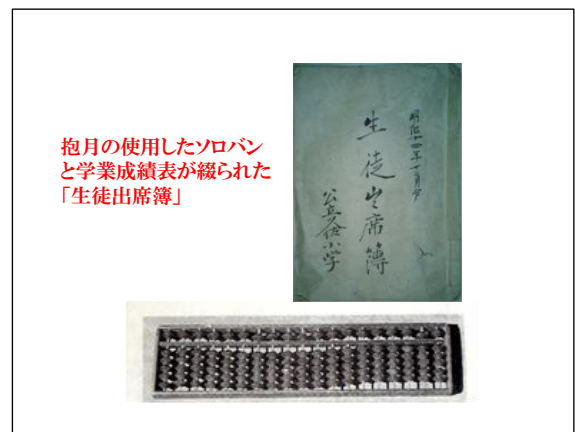
『故郷の父』より転載

### 熊屋 ⇒ 浜田へ

明治16年(1883年)に、抱月は久佐小学校中等科を卒業し、小国村の恩師桑田俊策の紹介で浜田町(浜田市)の薬局の見習生として住み込み小学校高等科に通学した。

明治17年(1884年)7月18日付で松江始審裁判所浜田支庁の給仕(日給8銭)として採用される。

明治19年(1885年)10月、島村文耕が浜



田支庁へ着任し、瀧太郎の上司として運命的な出会いがあった。

明治 21 年（1887 年）11 月に瀧太郎は「雇」に昇進し、月給 5 円が支給された。島村文耕は瀧太郎の持ち前の向学心を読み取り、上京させて勉強させようと考えた。

### 抱月二十歳の決断

明治 24 年（1891 年）春に、文耕は再び父一平に抱月との養子縁組を迫り、とうとう認めさせ、3 月 21 日、願いにより廃嫡。

同年 6 月 13 日、付、神奈川県都築郡都田村大字池辺 2613 番地島村文耕と養子縁組をなし、「島村瀧太郎」として島村文耕の養子入籍となった。

抱月、20 歳の決断と父母の気持を察するに余りあるものがある。

## 『浜田港』に寄せた序文

浜田港とは懐かしき名なり。

予が小学校時代と独学時代の記憶はすべて浜田にあり。

粟島下の水泳に危なく溺れ死せんとし少年の思い出はあわれ三十年の昔かな。

瀬戸ヶ島の翠畑今も当時のままなりや。

一丁田の丘に狐の火を見ながら、片側町の夕暮れに淋しくたたづみし日の事も夢の如く我が胸に残れり。

山陰の最底辺たる石見国は土瘠せて人の心また石の如く堅きが多けれど古は歌聖人麻と画聖雪舟とに万代不滅の足跡を遺させたり。

陰陽山脈の陰しき陰には、近世文明の波に洗われざる上古素朴の風今尚残れり、北海の岸には倒れるところ天縦の奇景を有す。

大正三年の今日、鉄道未だ此の国に入らざれども何人かあつて此の国を天下に推薦するものあらば日本に一名区を加うると共に予等郷党の喜びいかばかりぞや。

浜田港は石見の首都にして山陰道の最底辺に点ぜられたる眼目なり。

此の町の前途に必ず繁あるべし。

光輝あるべし。

大正三年五月

島村抱月識

### 抱月の知られざる内面

抱月の子煩悩ぶりは、余り知られていないが、抱月の 3 ヶ月間の書簡によって、その内容が汲み取れるのである。3 月 27 日、震也、君子、春子の学校仕度について、3 月 29 日、震也の通信簿の件(中山晋平、春子、君子宛も)、4 月 1 日、震也の病気、転地療養について、4 月 5 日、震也が「市ヶ谷へ転校しても良い先生がいるだろうか？」と心配をしている様子、4 月 17 日、震也の学校教師の件、5 月 16 日、中山晋平宛、歌のアドバイスなど。巡業先から書生として寄留している中山晋平の下へ頻繁に手紙を届けているのである。

また、ロンドンで買ったカメラを携え、時々、近郊へ子供たちを連れ出して撮影し、自分で現像する楽しみを覚えたのである。中山晋平が、震也、君子と 3 人で写っている写真がその雰囲気を見せている。

これらを総合すると、抱月は、演劇のみで、家庭を振り返らない人ではなくて、我が子ら

に強い愛情を注いでいた人間味溢れる一人の父親であったことが分かるのである。

### 故郷へ錦をなぜ飾らなかったか

抱月は、芸術座を束ね全国巡業で公演するためには、一座の 20 数人に旅費・給金を支払い、数か月前から興行先の交渉、チケットの販売依頼、会場の手配、公演演目の選択、一座の稽古、脚本の翻訳と演出など 5 年間にわたり、すべてを一人でこなしていた。正に、商業演劇の種を蒔くために不眠不倒の戦いをしていたのである。

## 帰去来故郷はやがて魂祭り

### (第一の理由)

山陰線が当時は、石見大田駅までの開通の為、一座の移動・輸送手段が無かったため。

### (第二の理由)

海外、日本全国津々浦々に演劇の種を蒔き二元の道（芸術と経営）を両立させるべく実践活動を遂行した。人生 50 年を想定して故郷に錦を飾るのはまだ思い半ばであった。

抱月は、大正 3 年に「浜田港に寄せる」の記述に「鉄道まだこの国に入らず」と記しているように浜田まで鉄道が開通することを心待ちにしていた。浜田への開通は抱月が亡くなってから 3 年後の大正 10 年のことであった。

【島村抱月揺籃期展】の様相      会場：浜田市金城歴史民俗資料館



## 【抱月図書のご案内】

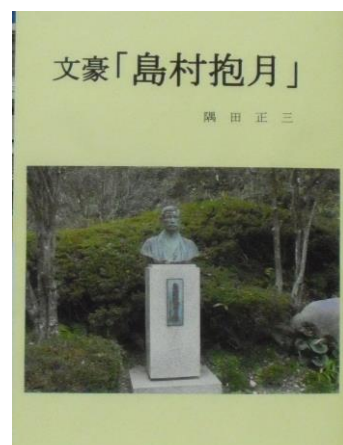
# 文豪『島村抱月』

A 5 判 P 86 定価 1,260 円(税込)

隅田正三著 波佐文化協会刊

島村抱月生誕 150 年を節目に、抱月の業績の再評価と多くの人に抱月の果たした業績を正しく理解していただくために最適な図書である。

写真資料を豊富に採用し、抱月の生誕地の解明と生涯を平易に解説した内容で、抱月ガイドブックの役目も果たす必見の図書である。



# 島村抱月の初等教育を検証する

## 学齢表

年齢	級	学年	名称
14	1	4	上
	2		
13	3	3	等
	4		
12	5	2	小
	6		
11	7	1	学
	8		
10	1	4	下
	2		
9	3	3	等
	4		
8	5	2	小
	6		
7	7	1	学
	8		
6			

※ 明治9年3月10日、小学校規則改正。  
尋常小学校は、下等4年、上等4年とし、1学年を2級に分け、半年毎に試験を受けて合格すれば上の級に上がることができる。

## 学齢表

年齢	学年	名称
14	2	高
13	1	等
12	3	科
11	2	中
10	1	等
9	3	初
8	2	等
7	1	科
6		

※ 明治13年12月28、教育課程を初等科3年、中等科3年、高等科2年に統一した。初等科3年を義務化とした。

抱月一家は、二子山の屋敷町から明治10年3月21日、再び下土居へ移転した。抱月は、満6歳となり小国尋常小学校へ入学した。下等小学校の課程を終え、明治14年5月に、久佐村熊屋へ転居した。久佐小学校では、上等1、2学年(中等科3年)を終え、明治16年には、高等科を学ぶため、浜田町の薬局へ勤めながら勉強をした。

初等教育を師範した桑田俊策(医師)が抱月へ与えた幼年期の教育を再評価する必要がある。